

第6章 神明後遺跡第51地点の本調査

I 遺跡の立地と環境

神明後遺跡は、東武東上線ふじみ野駅の東約300m、さかい川の谷頭部から約1,500m下った右岸に位置し、標高12～16m、現谷底との比高差は1.5mを測る。さかい川は本遺跡付近から崖を形成し始め、本遺跡をのせる南側台地は急斜面、対岸の北側は緩やかな斜面を形成している。

周辺の遺跡は、上流に中沢前遺跡、下流に浄禅寺跡遺跡、苗間東久保遺跡が隣接し、さかい川の対岸には富士見市の外記塚遺跡がある。

遺跡周辺は古くからの集落があり、現在でも大きな屋敷地が多く大きな開発もなかったが、ふじみ野駅の開設に伴い徐々に再開発が進みつつある。

本遺跡の最初の調査は1987年に大井町史編纂事業の一環として行われた。その後1993年に新駅へ延びる道路をはじめ、2015年12月現在、54ヶ所で試掘調査および発掘調査が行われている。

これまでの調査で縄文時代中期後半から後期前半の住居跡、奈良時代から平安時代の住居跡、中世の建物跡などの遺構を検出した。

II 本調査に至る経過と調査の概要

(1) 調査の概要

調査は共同住宅建設に伴うもので、原因者より2014年9月18日付けで「埋蔵文化財事前協議書」がふじみ野市教育委員会に提出された。申請地は遺跡の範囲内に位置している。申請者と協議の結果、遺構の存在を確認するために試掘調査を実施した。

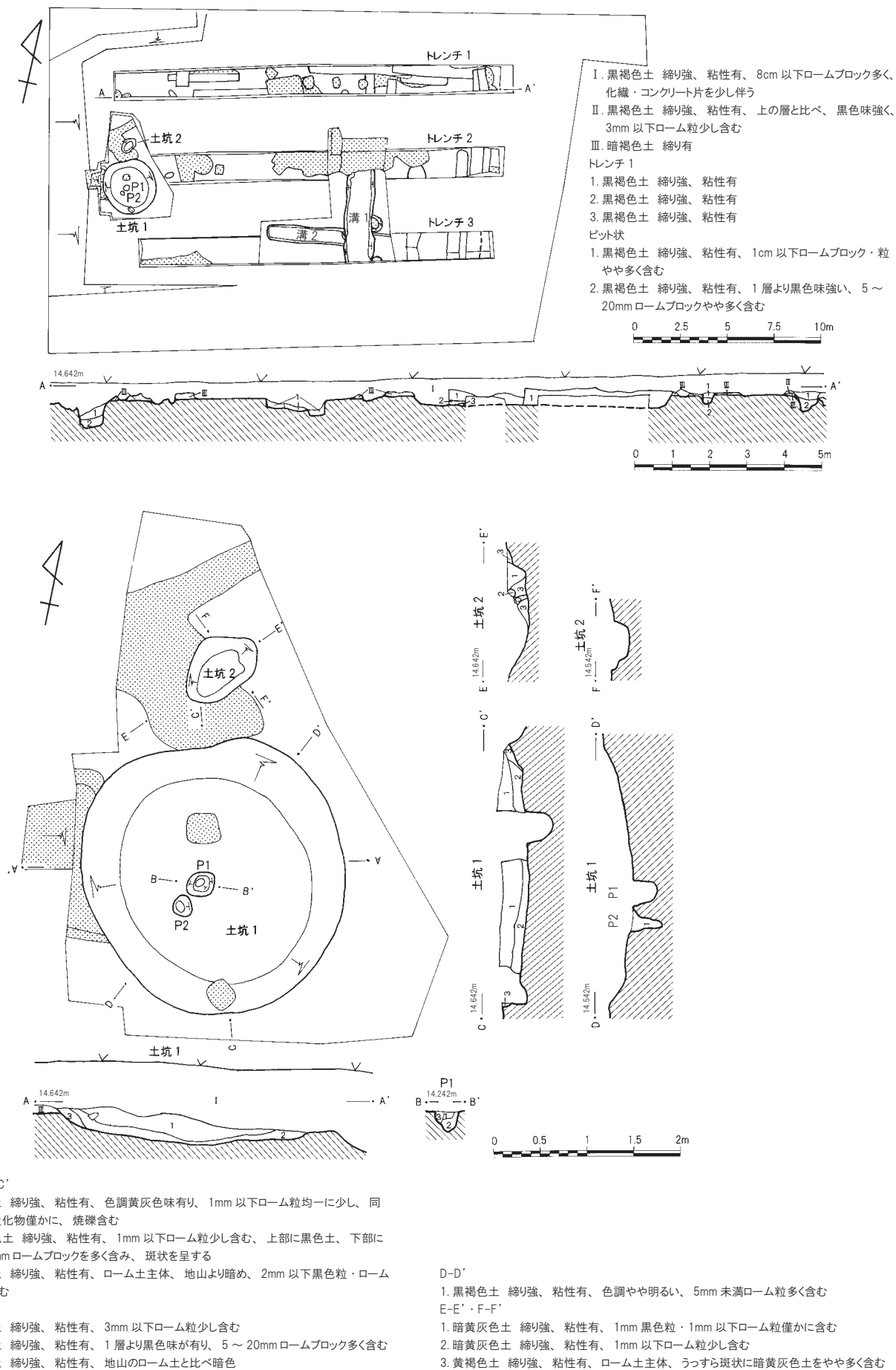
試掘調査は2014年11月5日～13日、幅約1.5mのトレンチ3本を設定し、重機による表土除去後、人力による表面精査を行った。その結果、現地表面から30～50cmの深さで縄文時代の住居跡か土坑とみられるプランを確認した。原因者と再協議の結果、遺跡への影響が避けられないため、原因者負担による本調査を実施した。

本調査は遺跡の確認された部分を、2014年11月20日から25日まで人力による調査を行い、同日重機で埋め戻して全ての調査を終了した。

試掘調査と本調査で確認された遺構は、縄文時代の土坑2基、中近世以降の溝2本などである。遺物は縄文土器等である。



第61図 神明後遺跡の地形と調査区 (1/4,000)



第 62 図 神明後遺跡第 51 地点遺構配置図 (1/300)、土層 (1/150)、土坑・ピット (1/60)

①土坑

【土坑 2】平面形態は楕円形を呈する。確認面径は 90

②溝

【溝2】溝2は東西方向に延び、溝1より新しい。断面は浅い「U」字形で、規模は上幅70～95 cm、下幅60～73 cm、深さ10.1～16.9 cmである。

③遺物

1は溝2で隆帯により口縁部文様帯と頸部の無文帯を作り出す。2は表土一括で、地文縄文に隆帯の蛇行懸垂文を貼付。ともに加曽利E I式。





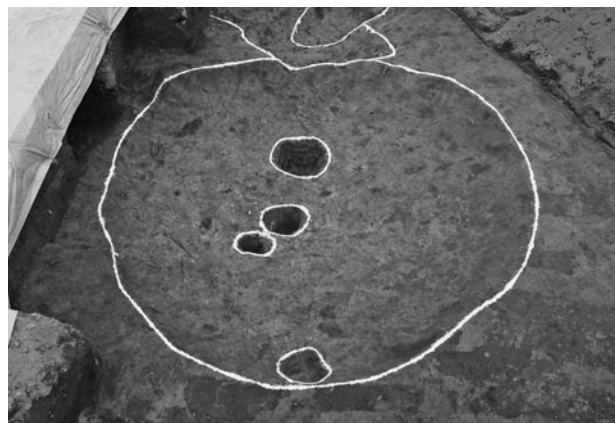
神明後遺跡第 51 地点調査風景



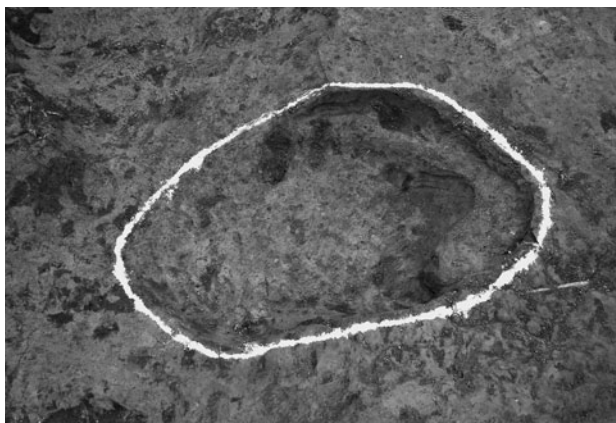
神明後遺跡第 51 地点調査風景



神明後遺跡第 51 地点土坑 1・2



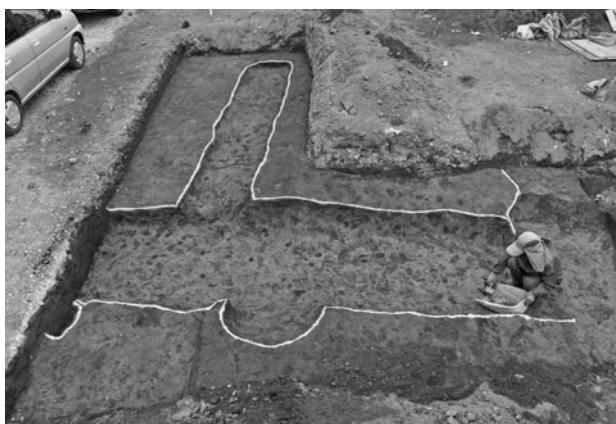
神明後遺跡第 51 地点土坑 1



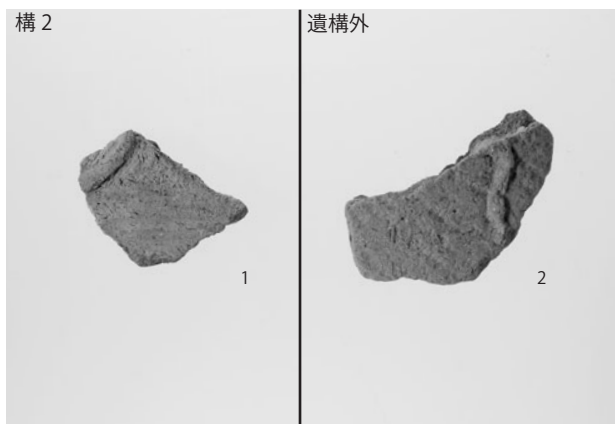
神明後遺跡第 51 地点土坑 2



神明後遺跡第 51 地点溝 1・2



神明後遺跡第 51 地点溝 1・2



神明後遺跡第 51 地点出土遺物